

第5章 現在の和歌山と将来



高度経済成長と工業の発展

時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
	昭和(戦後)・平成時代

成り立ちと成長

紀ノ川の^{かこう}河口から有田川^{ありだ}河口までの沿岸は、紀伊水道^{えんがん}に面しており、しかも阪神工業地帯^{はんしん}に近いところにあります。この地域は、昔から木材工業や繊維工業^{せんい}などが発達していました。第二次世界大戦前から大戦中にかけて、政府の軍需産業をより盛んにするため、各地方都市へも工場が建てられるようになり、この政策^{せいさく}にもとづいて、和歌山県へも軍需産業が進出してきました。紀ノ川河口へは鉄鋼業^{てつこう}と化学工業が、また南部の下津湾^{しもつわん}へは石油精製工場が建設されました。こうして県の北部臨海地域^{りんかい}の工業地帯がつけられました。

第二次世界大戦後になって、工業地帯はさらに大きく発展しました。1960（昭和35）年ごろからの高度経済成長期を中心に、約700haの工業用地が造成されました。そして、各工場とも大型専用船^{にゅうこう}が入港できるように整えられました。製鉄所^{てつこうせき}へは、鉄鉱石と石炭がオーストラリアなどから、また石油工場へは、原油がアラブ首長国連邦^{れんぽう}などから、それぞれ輸入され、製品は主として日本国内で販売されましたが、その後、外国へも輸出されています。

紀ノ川河口の工業

1942年に河口の北岸に建設された製鉄工場は、軍の管理のもとに鋼管^{こうかん}から兵器用の部品などをつくりました。第二次世界大戦後も生産を再開して鋼管の生産を開始しました。1961年に製鉄用高炉^{こうろ}が完成しました。その後次々と高炉が建設され、1969年には第5号炉が完成して、鉄鋼の1年間の生産量は922万tという世界的な工場に発展しました。ところが、この会社は、生産部門を鹿島^{かしま}（茨城県）へ移したので、ここでの鉄鋼生産は大きく減ってしまいました。しかし、和歌山の工場は新しい油田を開発するのに必要なシームレスパイプ^{きよてん}の生産で実績をのばし、その生産拠点として世界中から注目されています。2009（平成21）年には新しい高炉も完成する予定で、鉄鋼の増産をめざしています。



紀ノ川河口にある製鉄工場（和歌山市）

1942年に河口南岸に建設された化学工場は、戦争中の石油不足の対策として、東南アジア方面のヤシ油から航空機の潤滑油^{じゅんかつゆ}をつくる研究と製造を行っていました。第二次世界大戦後は、石鹼^{せつけん}や頭髮油^{とうはつゆ}などの生産に切り替え、現在は家庭用石鹼・シャンプー・洗剤や化学製品をつくっています。

* 1 継ぎ目のないパイプで、溶鉱炉でできた厚い鉄をそのまま丸いパイプにしたもの。

また、水軒沖を埋め立て、1967年に木材工業団地が、1997年には金属機械工業団地が建設されました。

下津湾の工業

日中戦争が長引くことが予想されていたので、昭和初期に不振になった木材工場や貯木場の跡地の利用に着眼して、深くて波の静かな下津湾には精油会社が進出しました。1938年に湾の北岸に大規模な製油施設がつけられました。翌年には、下津湾の南側、山一つ隔てた椒村（有田市初島）の砂浜にも石油工場が建設されました。トンネルで下津港と工場を結んで油送管を通し石油精製を開始しました。しかし、この両工場は、第二次世界大戦末期にはアメリカ空軍の爆撃を受けて両工場とも生産ができなくなりました。

第二次世界大戦後精油を再開し、下津湾の南北両岸の2つの石油会社とも新しい精油機械を整えました。原油を積んだ大型のタンカーが着岸できる栈橋もつくられ、南岸の工場では、アメリカの石油会社から原油を購入して、製品の販売はアメリカの会社を通して行っています。1960年ごろから海岸の埋め立てにより工場敷地も広げ、オートメーション化した大製油所に変身しました。その後北岸の石油会社は、経営不振から工場を撤退しました。南岸の石油会社は、1日に約17万バレルの石油精製能力をもっており、製品はガソリンや灯油などで、船舶やタンクローリーで国内の市場へ販売されています。

1960年代になってからは、黒江湾の埋立てがはじまり、石油精製・鉄鋼の両会社と火力発電所がつけられました。このうち鉄鋼会社は、1966年に鋼管専用の工場が、1973年に火力発電所が操業を開始して工場地帯をつくっています。

また、1985年には御坊市の日高川河口南岸でも海岸を埋め立てて、火力発電所が建設され、その電力のほとんどは阪神地方へ送られています。

大気汚染とその対策

石油や石炭を多く使う北部臨海工業地帯では、1960年代になって工場の生産が増えるにともない、大気汚染などの公害が多くなってきました。公害をなくす住民運動も活発になり、1967年に県庁に公害対策室（現在の地域環境課）が設けられました。大気の流れを防ぐ法律などによって空気の汚れの様子を常時監視するようになりました。また2000年には、常時測定局を設置していない地域の大気調査をするため環境測定車「ブルースカイ21」を走らせています。この監視は、和歌山市から田辺市までの広い地域で行われ、大気汚染が多くなったときに注意報などを出すようになっています。その結果今は、おおむね良好な大気環境が保たれています。



有田市にある石油精製工場



大気汚染常時監視網（2008年）

* 1 1バレルは約160リットル弱にあたる。